

仏教と日本文学の接点への一考察

白 土 わ か

仏教と文学とは、本来、別のものであり、異なるものを指向している。仏教内においては、世俗にかかわる文学や芸術は一応否定さるべきものであったし、文学や芸術においても、あまりに仏教的な色彩をもって覆われたものは、芸術性に乏しいものとされた。しかし、日本においては、平安時代以来、仏教思想が文学論や芸術論の根柢にかかわりあい、その理念を培い、文学をして文学たらしめ、又芸術の美をして美たらしめた役割を果たした事実を注目しなければならぬ。それはキリスト教が、人間の事に関し、あまり多くの関心をよせなかったこと、文学と宗教とは別なものとして進んだのと違った性格をもっていた。それは何故なのであろうか。日本の文学論にあらわれた仏教思想のあとを追いつながら、少しくその考察をすすめてみたいと思う。

源氏物語螢の巻^①には、紫式部の文学論が、光源氏の言葉の形をとってのべられてあるが、

……日本紀などは、たゞ、片そぼぞかし。これらにこそ、道々しく、くはしき事はあらめ。……その人のうへとて、有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にもいひ伝へまほしきふし^くを、心にこめがたくて、言ひおきはじめたるなり。……ふかきこと、浅きことのけじめこそあらめ。ひたぶるに、空事といひはてむも、事の心、違ひてなむありける。

仏の、いと、うるはしき心にて、説きおき給へる御法も、方便といふ事ありて、さとりなき者は、こゝかしく、たがふ疑ひを、おきつべくなむ。方等經の中におほかれど、いひもてゆけば、一つ旨にあたりて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この、人のよしあしきばかりの事は、かはりける。よく言へば、すべて何事も、むなしからずなりぬや。

物語というものはフィクションであつて、それは事実を事実として書いた日本紀等の歴史書よりも、反つて、人間の眞実を伝えるものだといふのは、紫式部の達見であるが、そのフィクションを仏の方便に喩えている。方等經の中に多い方便も、結局は、眞実と同義であるといふこと、それは天台の法華經解釈の態度であつた。方便即眞実の思想である。四十余年未顕眞実の間に説かれた方便の教は、そのまま眞実と同義であつたこと、そうして方便も眞実もともに、諸法の実相であるという解釈のもとに、説明された天台の思想であつた。方便の説が、方便としての内容のままに、眞実の意義をもつこと、それを、天台の思想をかりるまでもなく、式部は達観しうる識見をもつていたではある。あの尨大な物語は、仏教の思想をまづ書かれたものではないからである。しかし、式部のもつ人間観、文学観

と、期するが如くに歩みよつた仏教思想は、そこに接点をもち、結びつき、式部の思想に、更に、よりたしかな説明を与え、培うものがあつたのではないかと思われる。

式部の仏教思想が、天台の教義を媒介として入つていたものであることは、その当時の一般の趨勢によつても自然のことであるが、その兄、定暉は三井寺の僧侶であつたし、天台の相承血脈譜には式部の名を加えているものもある。又、源氏物語賢木の巻には、

六十巻といふ文よみ給ひ、おぼつかなき所々、解かせなどして、おはしますを、山寺には、いみじき光、おこなひ出したてまつれりと、仏の御面目なりと云々。

と、光源氏をして六十巻の文を読ましめてゐるが、その六十巻とは、法華玄義、文句、摩訶止観各々十巻と、釈籤、記、弘決各々十巻の六十巻をさし、当時の一般人が、この様な仏書に親しんだ例にもなるが、紫式部の天台教学への親近と、造詣の深さも察せられるものがある。

さて、式部は、螢の巻の文学論に続けて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この、人のよしあしきばかりの事は、かはりける、というが、人の世のよきあしきは、仏教の菩提と煩惱であり、それは煩惱即菩提が、当然そこに考えられるであらうし、又、よく言へば、すべて何事も、むなしから

ずなりぬや、とは、人のよしあしきことも、人の世のあれこれも、みな空しいことではないのだ、という、現実への凝視と深い理解と肯定とがある。源氏物語に描かれる壮大な現実の世の絵巻は、この達観のもとにくりひろげられるものなのであり、その達観は、諸法実相論の、存在の極相をうけとめてゆく姿勢によって支えられているともいえる。十界の様相を性として具する存在の妙有、人のわれに、地獄も仏界も具しあう。人間の矛盾も、はかなさも、その存在の根柢において把握していた式部の、はかなけれども、みすてがたい存在の様相への肯定をくみとることができよう。式部によって打ちたてられた文学理念は、まことに確かなものであったし、仏教思想は存在の極相、その微妙さを語る点において式部に影響を及ぼしたのである。時あたかも恵心僧都は、源氏物語成立より約二十年前に、往生要集を撰し、慶滋保胤は日本往生極楽記を出している。しかし、式部が決定的に浄土教にひかれるまでには、まだ時は熟していない。往生要集にも描かれた十界の様相を凝視していたのであり、又、往生極楽記の記述の如き紫雲に、のぼることへのためらいがある。そこに、たゆたう式部の内面性と同時に、平安仏教の様相をみるべきであろう。

二

往生要集の六道の描写は凄惨をきわめるが、それは唯心のまねく報であるということ、又、存在の極相を諸法実相であると説くにしても、それは単なる存在論ではなく、一心三観により一境三諦を照すのであり、実なる想 *Bhūta-sattva* により実相を的取するのであり、一心のあり方を定めることこそ、肝要な点であった。それは、八万四千の法門の肝心でもあった。

平安中期以来、日本の文学にも、内面の心への傾きが目立ってくるようである。源氏物語の心の深さは、ここにしばらく措くとしても、まず古今和歌集序に、「やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける」と、心が意識されてくる。古今集巻三には、「はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく(僧正遍照)」とあり、客体の主観化がみられてくる。藤原公任の新撰髓脳には、

凡そ歌は心ふかく姿きよげに、心におかしき所あるを、すぐれたりといふべし。

心姿相具する事かたくは、まづ心をとるべし。という。又、和歌九品には

上品上、これはことばたへにしてあまりの心さへある也
 上中 ほどうるはしくて余の心ある也

上下 心ふかからねどもおもしろき所ある也

中上 心詞とどこほらずしておもしろき也

(以下略)

と、上品上の、ことばたへにしては、後世の世阿弥の能楽論、九位の妙花につながるものであるが、何れも心を重くみるようになってきていることがしられる。公任の撰した和漢朗詠集には、摩訶止観卷第一の上より、

月隠重山兮 擊扇諭之

風息太虚兮 動樹教之

の句を引用している。この引用の仕方には、摩訶止観の思想よりも詩的なものに着目する態度が、みられるようであるが、公任が摩訶止観をよくみただけであることは充分に察せられ、その和歌九品や、新撰髓腦の心は、止観と無関係のものではないであろう。

後拾遺和歌集釈の部には、伊勢大輔の、三界唯一心の歌、「ちる花も惜まばとまれ世の中は心の他のものとやほきく」が出てくるようになる。歌の詞書では、金葉集以後、何々の心をとというのが目立ってくる。新古今集に至って、それが顕著になるのはいうまでもない。それ以後、歌

論、連歌論にみえる心の問題は例をあぐるにいとまなく、それは別に稿をあらためるべきであろう。

三五記によれば、藤原俊成は、和歌は狂言綺語に似たり、出離の要道こそそそびたるべけれど、住吉に参籠して一心に祈請し、ただ歌をもって往生すべしとの示現を得たとある。又、同じことが正徹物語には、住吉明神の示現により、和歌仏道全無二、の安心を得たという。正徹物語には、定家も同じく住吉に参籠、歌と仏道との問題について嘆き申したるところ、汝月明也、との住吉明神のさとしを得て、得るところがあったと伝えている。

かの紫式部の文学観のゆるぎない確かさに比べ、そこには動揺があり、不安がある。しかしなお、俊成の歌論、古来風体抄によれば、

しかるにかの天台止観と申すふみのはじめのことばに、止観の明静なること前代もいまだきかずと、章安大師と申す人のかき給へるが、まづ、うちきくより、ことのかかさも限りなく、おくの義もおしはかられてたふとくいみじくきこゆるやうに、この歌のよきあしき、ふかきこころをしらむことも、詞をもてのべがたきを、これによそへてぞ、同じく思ひやるべき事なりける。

とあり、摩訶止観の止観明静なることを、歌の基準とする

むきがみえる。又、同じく古来風体抄に、

これは浮言綺語のたはぶれには似たれども、ことのふかきむねもあらはれ、これを縁として、仏のみちにもかよはさむため、かつは、煩惱すなはち菩提なるが故に、法花経^④には、若説俗間経書略之資生産業等皆順正法といひ、普賢観^⑤には、なにものかこれつみ、なにものかこれ福、罪福無主我心自空なりとき給へり。よりていま歌のふかきみちを申すも、空仮中乃至三諦に似たるによりて、かよはしてしるし申すなり。……

狂言綺語をもって讚仏乗の因となし、俗間の経書も実相の故に正法となるのでありとし、空仮中の正諦にかよわして歌の道を考えようとする。仏教は、その文学論において、ふかく滲透して、いわゆる仏道と和歌と全く無二なるものとなつていった。

定家は、その歌論、毎月抄に、歌に十体をあげ、

さてもこの十躰の中に、いづれも有心体にすぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。きはめて思ひえがたう候。とざまかふさまにてはつやつやつづけらるべからず。よくよく心をすまして、その一境に入りふしてこそ、稀にもよまるゝ事は侍れ。されば、よろしき歌と申し候は、歌ごとに心のふかきのみぞ申しためる……

と、その中、有心体を最も歌の本意とするが、その心とは、止観によつて養われた心である。よくよく心をすまして、その一境に入りふしてこそ、稀にもよまることは侍れ、とはまぎれもなく止観である。又、

此道をたしなむ人は、かりそめにも執する心なくて、なをざりによみすつる事侍るべからず

そこには仏道の要心があり、

常に心ある体の歌を御心にかけてあそばし候べく候。

但、すべて此躰のよまれぬ時の侍る也。蒙気さして心底みだりがはしき折は、いかによまんと案ずれども、有心体出来ず。

蒙気さして心底みだりがはしきとき云々とは、正修止観に對する前方便にあたるといえよう。定家の明月記によれば、彼は熱意をもつて摩訶止観を書写し、校合したことが知られるが、摩訶止観が、定家の歌論に根づくよく入っていることは、さきの有心体をはじめとして、明らかな事実である。この場合の止観は、心一境処に入りて、存在の様相を的取し、歌になることである。いわゆる後年の齊藤茂吉の言う実相観入の文学は、定家においてすでに、うち立てられていたのである。又、それは定家にはじまるというべきでなく、すでに定家以前からの系譜であった。「ささめ

ごと」に、「経信卿、『和歌は隠遁の源、菩提をすくむる直路也。真如实相の理、三十一文字におさまれり』といへるを、定家卿此の旨をねんごろに称揚したまへり」とある。

それは、かの芭蕉の、竹の事は竹にならへ、松の事は松にならへ、という文学論に展開する素地も、すでにここにきざしていたのであって、仏道修行である止観の行法は、文学の道に転移しうる性格のものであった事を留意すべきであらう。

三

次に、心敬の「ささめごと」に例をとって考えてみる

定家卿詠

秋の日のうすき衣に風たちて行く人侍たぬすゑのしら雲

清岩和尚歌

秋の日は糸よりよわきさゝがにの雲のはたてに萩の上風

これらの秀歌、まことに法身の体、無師自悟の歌なるべし。言葉にはことわりがたかるべし。巫山の仙神女の姿、五湖の煙水の面影は、言葉にはあらはすべからず。

若以色見我 以音声求我

是人行邪道 不能见如来

我覚本不生

出離語言道^⑧

諸遇得解脱

遠離於因縁

知空等虚空^⑨

定家や清岩（正徹）のこのほそく透徹した歌をもって、法身の体としているところ、仏教思想の枠をこえて文学にうけとめられたあとをみるべきであらう。法身は、ここでは法性であり、法身の体は、法性の本質 svabhava であるが、法性の本質は、このようなほそい、かそけさをもって語られたのである。それは又、色を以て音声を以て求められぬ如来の法身であり、言語にあらわしがたいものである。その言葉にからぬ如来身を、秋の日のうすき衣に風たちての歌をもって示しえたところ、それは日本的な仏教思想のうけとめ方であり、繊細にして透徹した、仏教思想と文学の結びつきは注目に値する。

又、「ささめごと」に、

このさまぐの跡なし事も、朝の露、夕の雲の消えせぬ程のたはぶれ也。はかなきすさみなる哉。仏の御法をだに心にとめぬれば、凡に落ちぬる、と申すとかや。此の道を悟り知らむよりも、たゞいま当来すべき一大事因縁を尋ねあきらめ、ながく生死をこそ捨てたく侍れ。いたづら事に光陰を消ちて闇きに入り侍らむこと、八千度

悔いてもあまりおほく侍るかな。

しかはあれど、猶深く思ひとき侍れば、いづれの法いかなる教へにも、ながく凡聖のへだて侍らず。さまざまの方便の門のまどひて、目前の十界をはなれて、三世にめぐると見る人こそおろかに侍れ。それも明らかなる眼よりは同一性なれば、あやまる道なかるべし、もとより太虚にひとしき胸の中なれば、いづれの道をもてあそび、いかなる法をつとめても、其の相とまるべきにあらず。三世に主なき方法なり。たゞ幻の程のよしあしの理のみぞ、不思議の上の不思議なる。それも天然法爾、あなむつかしの心づくしや。何事もさもあらばありなむ。

はかなきすさみの連歌の道よりも、当来すべき一大事因縁をあきらめ、生死を出づる道こそ求むべきことは重々、痛感されながら、なお、この道にとどまる理由を、仏の御法だに心にとめぬれば凡に落ちぬると申すとかやといつていのように、仏法にのみ停滞することの空しさの故としているのであるうし、又、しかはあれど猶深く思ひとき侍れば云々とのべているように、仏法にも凡聖の隔ては結局なきがごとくに、いづれの道にも、いかなる仏法にも、劃然たる差別はないのだというのである。三世に主なき方法であり、よしあしの理は幻の如く、天然法爾のままに、うち

まかせてゆくより仕方のない、文学への道があるようである。「人は一夜の程にも八億のことを思ふとなれば、跡なしごとにつれなしづくり侍るも、罪ふかきわざなるべし」とも、「ささめごと」の始に心敬はいっている。人間の数々の思いを、一概に否定しざることはできなかった、又すべきではないと考えた、その具体への姿勢が、心敬をして、仏道の中のみ入りこませなかったのであろう。すべては天然法爾たる法性の域を出ないのである。

四

心敬は、法身の体といい、天然法爾ともいった。それらを羅什の大乗大義章を引用しつつ考えてみたい。羅什の思想や翻訳は、後の中国仏教、とくに天台や三論への影響大きく、ひいては日本仏教にもつよい力をなげかけたと思われるからである。そして、心敬の法身、天然法爾の考え方は、心敬のみにとどまらず、日本の古い文学者たちの、仏教思想に通じあうものであるからである。

心敬の法身の体は法性をさすことはさききのべたが、大乘大義章^⑧によると

諸法実相、仮名如法性真際、……如地堅性、水湿性、火熱性、風動性、火炎上為事、水流下為事、風傍行為事、

如是諸法性、性自爾、是名法性。

とみえており、この箇所は、後に法然上人も引用されているところであって、しばらく自然法爾ということの説明にも、又、法性について考えるにもポイントとしてみたいのである。地等に関して伺察せらるるとき、堅等なる属性をこえて所相なる地の自性はなく云々という叙述は、月称註中論釈初品にみえ、地の属性を堅とする表現は、一つの型のようであり、大智度論卷三十二にも、如、法性、實際を諸法実相の異名とし、如の各各相として、地の堅相、水の湿相、火の熱相、風の動相等をあげ、それらの各各相は畢竟空であるとする。

月称註中論釈の場合と、大智度論の場合、それが大乘大義章になる場合と、そこに概念の転移がみられる。堅等なる属性をこえて相としてとられる自性はないというのは、空をいわんがための表現であり、如、法性の各各相は地の堅等であり、畢竟空であるというのは、畢竟空ではあるが、各各の相を想定せしめる有への転開への機微を示してきているようである。大乘大義章になると、地の堅性等や、火災は上るを事とし、水は流下するを事とするというように諸法の性は、自らにそのように自然なるものと、觀ぜられてくる。有仏無仏相性常然というに似て、そこに存在

のあり方に比せられ、存在のあり方にも一応かかっている法性が考えられてくる。

仏教はもともと縁起の道理の如くに知見する心の問題であり、如実知見を事とする空の道であった。しかし、空としてみるという意味において、それは存在論的性格をおびてくるものであり、とくに羅什の翻訳態度にはそれがつよいといわれ、大智度論の翻訳にも、そのことはいわれるであらうし、大乘大義章にもまたそうしたことがみられるであろう。その影響は、天台の諸法実相論にもあらわれ、存在の極相をみきわめる底のものに展開し、その哲学は、前記の源氏物語以下の文学論に影響を及ぼしたことをみてきた。

さて、大乘大義章の前掲の箇所は、法然上人の和語燈錄に、

法爾道理と云事あり。炎は空に登り、水は下りさまに流る。菓物の中にすぎ物あり甘き物あり。此等は皆法爾の道理也。阿弥陀仏の本願は、名号を以て罪惡の衆生を導かんと誓玉ひたれば、只念仏だにも申せば、仏の来迎は、法爾の道理に備はるべきなり。

と、法爾なる法性は、阿弥陀・仏の本願と念仏という宗教的な形態として、あらわれうけとめられてゆく。

法爾なる法性は、心敬にあっては、秋の日の歌をもつてうけとめられ、天然法爾の法の不思議の前に、よしあしきの是非を幻と見、文学の道は、その意味において肯定されてゆく。俊成にあつても和歌仏道全無二であり、歌の道をして往生すべしといひ、何れも法身を問題としながら、法然の浄土教は、弥陀への念仏と救済となり、心敬らにあつては、より存在論的方向においてとらえていったといえる。

文学と仏教との結びつき、接点は、日本においては、仏教のもつ人間の宗教としての立場と、それが、われの心にかかわる存在論的傾向をもつたという点から、考えられる一面をもつていたのではないかと思うのである。「ささめごと」に、「諸道に相資相反とて、混合して宜しきもあり。悪しきもあるべしとなり。学問、仏道修行、手跡などは、歌道に相資の道なるべし」といひ、又、「本より歌道は吾が国の陀羅尼なり。綺語を論ずる時は、経論をよみ禅定を修行するも妄想なるべし」といふ。文学を綺語とするなら、経論も綺語であり、禅定も妄想であるという、経論、禅定に停滞することの愚かさを知っていたのである。それらをこえて、心をもつて参すべき世界、それを弥陀の世界

とうけとめるか、心行所滅のところを「秋の日の」の歌の心をもつてうけとめるか、そこに仏教と、文学の世界の差異があつたようである。

註①

以下、日本文学のテキストは岩波日本古典文学大系本による。但し、古来風体抄と三五記は日本歌学大系本。

- ② 紫式部日記「いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひ侍らむ。世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに懈怠すべうも侍らず。ただひたみちにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり」

- ③ チベット訳、金剛般若経による私見。

- ④ 大正蔵九卷、五〇頁a、法華経法師功德品に若説俗間経書、治世語言資生業等、皆順正法、とあり。

- ⑤ 大正蔵九卷、三九二頁c、仏説観普賢菩薩行法経に、何者是罪、何者是福、我心自空、罪福無主、一切法如是、云々とあり。

- ⑥ 金剛般若経。大正蔵八卷、七五二頁a。

- ⑦ 大日経卷二。大正蔵一八卷、九頁b（大毘盧遮那成仏神変加持経）

- ⑧ 大正蔵四五卷、一三五頁c。

- ⑨ 山口博士、中論积卷一、七九頁参照。

- ⑩ 大正蔵二五卷、二九七頁b。